

# 特 別 講 演

( 第 1 会 場 )

午後 2 時 ~ 3 時 3 0 分

## 1 英国流—レディングの酪農研究所で見たことなど

帯広畜大教授 鈴木省三

一昨年から昨秋にかけて1年間、文部省在外研究員として、英国レディングの酪農研究所(NIRD)に滞在しましたので、その折、中から見、また感じた英国人の研究に対する考え方やその研究態度などについて、同国の畜産研究組織およびNIRDの現況を通して申し上げてみたいと思います。

1. 研究所 この国の農業関係の研究は1931年にできた農業研究会議(ARC)によって統轄されています。この会議は学識経験者15—18人と関係官庁職員で構成し、主として国の予算から出される研究費(約100億円)で運営します。

この会議直轄の研究所は全国に25カ所あり、その他に22カ所の独立研究所に研究費を配分、大学・特定研究所にも研究費・奨学金を支給する、農業研究の総元締になっています。

この47の研究所の中で、直接畜産に関係あるものでは、草地研究所1、傾斜地農業研究所1、育種研究所3、家畜生理・栄養研究所4、獣医研究所2、酪農研究所2、家禽研究所2などが含まれています。NIRDや英国人自慢のDr. Blaxterが所長をしているロウエット研究所などは、独立研究所の一つです。

NIRDは、形の上ではレディング大学に属しており、最高委員会には大学のスタッフが入っていますが、実際の活動はほとんど大学とは関係なく、独立した研究所のように感じます。330ha、牛約500頭の実験農場を含めて、スタッフは450人、13の部に130人の研究員がおり、関係研究所の中ではもっとも大規模なものです。

2. 研究の方向 NIRDのような研究所は、その名称からみても応用的研究が主体とみられ、研究員もそのように言っています。しかし、実際には、牛乳蛋白質の研究・乳腺代謝の生化学的研究のような、かなり突っ込んだ基礎的研究をどしどし取り上げます。乳房炎の研究などでは、一面で予防・治療・発生時期のような直ぐにも応用できる試験をするのと並行して、原因探求・細菌学的検索をじっくりと進める、落ちついたオーソドックスな研究が多いようです。

私の加わった、牛の自由採食量についての実験でも、実験動物を数多く揃えるよりはむしろ小数に抑えて、その代り、消化試験、摂食行動・前胃運動の記録、胃内線維消化力・消化管通過速度・第1胃内容量・血中VFAなどの測定を一緒に実施し、いろんな方向からちみつつ検討する行き方を取っています。

4. 共同研究 研究所内の部にまたがる共同研究は、かなり自由に、また数多く組まれています。例えば、ミルクカーの研究では、乳牛管理部と微生物部・機械部との共同で試験計画を立て、また、消化試験の化学分析は化学部、各部のデータの統計処理は統計部、という具合です。しかし、その協力態勢は必ずしも円滑にしているわけではなく、分析が遅れて1年前のサンプルが研究室の戸棚一杯

たまってみたり、統計部には、実験計画の打合わせがないのに、データ処理の依頼が多かったり、矛盾や支障が少なくないようです。

彼等は拙速よりも、ゆっくり磨擦なく改善するのが英国の行き方だと、至って気長に待ちます。

5. 施設 これはと眼を見張るような施設はあまり見られません。古い建物、狭い研究室など、むしろ気の毒に感ずる程。でも彼等はそれほど貧しいとは思っていないようで、研究費の申請を出せば、他の研究所のテーマとダブらない限りA R Cから予算が来るんだと申します。

ただ、有効に使える施設、ほんとうに必要な器具を、各自慎重に考えた上で購入する点、日常の仕事が無駄なく能率的にできるような細かい配慮が払われている点には感心します。これは、長い研究の伝統と彼等の計画的な生活態度によるものかと考えます。

6. 交流 35 Kmのドーバーを越えれば大陸、航空機なら数時間でほとんどのヨーロッパ諸国に行ける位置ですから、国内ばかりでなく国外の研究者が盛んに訪れます。窓口はインフォメーションオフィサーで、電話を武器に各研究員と連絡をとりながら、てきばきと訪客の時間表をつくり、無駄のない見学・討論をさせてくれます。

研究成果がペーパーになるには、1年から2年かかるのは普通ですから、この交流が情報交換に果たす役割は極めて大きいと思います。

7. 普及 研究成果の発表は学会や学会誌を通じて、また概要は研究所年報で発表されますが、農家への普及に直接関係することは全くありません。普及の仕事は専門の普及組織(N A A S)が担当し、N A A S自体も実験農場や実験室を持って独自の実用的試験をします。

直接の普及業務はしませんが、農家の人達の団体がよく見学に来ます。また、オープン・デイと称する所内開放が年に一度あります。このような時は、研究員は自分の研究を理解してもらうために、実に熱心に説明します。来訪者も遠慮なく質問・意見を出し、オープンデイの時など、各室とも研究成果を示したパネルや実験装置を前に、あちらでもこちらでも盛んなデスカッションが聞かれます。

農民の研究に対する理解の深さ、一般の人達の畜産に対する関心の深さが、このような研究所の存在を確り支えているように感じます。

## 2. アメリカの畜産事情を視察して

道酪農草地課課長補佐 和田 晴